

戦前の政府の外交認識、情報公開のあり方について
多大な示唆を与えてくれる比類なき貴重な資料集。

外務省公表集

全12巻

佐藤 元英 監修・解題

クレス出版

『外務省公表集』刊行にあたって

宮内庁書陵部主任研究員

佐藤 元英

正しい国際認識を持ち、いかに国際協力に参画して行くべきかは、今日の我々に課せられた義務でもある。従って外交問題に関する政府の公表に対しては、大いなる関心と厳しい評価を以て見守る態度が必要である。

『外務省公表集』は、外務省から文書によって発表された主として声明、談話、通告、説明、交換公文などの外交関係記事を蒐集し、記録に留めるために編纂されて、さらに国民一般に公刊されたものである。大正十一年に大正八、九年分の発表文書を第一輯として外務省情報部より刊行されて以来、昭和十五年までに十九輯と、別冊として『満州事変及上海事件関係公表集』（一冊）、『支那事変関係公表集』（五冊）が刊行された。昭和十六年以降は内閣情報局にその編纂が移され、『政府公表集 対外関係』（四冊）と改称、昭和二十年二月に昭和十八年分の発表文書を刊行して終戦を迎えた。戦後は昭和三十年になつて外務省情報局において編纂を再開し現在に至っている。今回復刻刊行する『外務省公表集』は、その内の戦前期の部分である。

第一次大戦中の各国宣伝戦に日本が立ち遅れ、パリ講和会議ではとりわけ情報啓発不足のため苦い経験をしたが、その反省と新外交時代への対応の要請から、大正十年八月外務省に情報部が設置された。情報部の活動は、対外宣伝を主体としていたことは勿論であるが、それとともに国内世論の指導、統一を計ることも肝要であるとされ、その目的として「公表集」が刊行されたのである。満州事変、日中戦争、太平洋戦争と不幸な戦争を歩んでしまった経緯に重ね合わせて、その間の対外宣伝及び国内宣伝としてなされた外務省公表の担った役割、国民に及ぼした影響の重大性を考えることは、現代の我々にとつて極めて意義深いことであり、今回復刻刊行する『外務省公表集』は、まさに国際認識についての過去の反省と、政府の情報公開のあり方について、さまざまな示唆を与えてくれる比類ない貴重な史料集である。本書の刊行は日本外交史研究は当然ながら広く国際関係の研究に裨益するところ大なるものがある。

貴重なる公刊資料

亜細亜大学学長
東京大学名誉教授

衛藤 藩吉

現在我々は毎年「外交青書——わが外交の近況——」を見ることが出来る。これは外務省が編集公刊するもので、読めば日本外交のあらましと、外務省が国民に日本外交をどう理解してもらいたいのか、を知ることが出来る。しかし、外交は近代社会においても、なかく秘密外交であった。そして要路の少数者の手によって外交が遂行されてきたのが、実情であった。英国議会民主制のなかにあっても、一九世紀の偉大な外交家パーマーストーンは「英国人の商業的利益を害わないかぎり、私はほとんど自由に外交上の決断をすることができた」と語ったと言われるほど、外交はいわば密室の中で意思決定し、かつ遂行できたのである。近代日本においても、なかく外交に関して、国民の理解を求めるような努力は、政府の側からほとんどなされなかった。唯一の例外はおそらく陸奥宗光の「蹇々録」であろう。三国干渉に屈したとして、ごうごうたる非難を浴びた外相陸奥が、じゅんじゅんとして国際情況の分析と、多交の要諦とを説いた個人の論策である。

かえりみると、外務省が国民に向かって、外交に関する文書類を編集公刊したのは、大正十一（一九二二）年、本公表集第一輯に始まる。第一次大戦末期からの民主化の浪は、わが外務省にも押しよせ、外務省をしてこのような決断をさせたものであろう。したがって、今日の外交青書と同様、戦前わが外務省が何を考え、いかなる情勢分析の下で外交意思決定を行っていたか、そしてそれをどう国民に訴えようとしていたか、を知る唯一のまとまった公刊資料である。その意味でこの公表集は貴重な存在である。

今回大正八（一九一九）年から昭和十八（一九四三）年にわたる、この公表集すべてを合本復刻されるという。復刻を決定されたクレス出版に敬意を表し、これを江湖に推すべく一筆したためた次第である。

最初に見て、そして最後に再び見る資料集

桜美林大学教授

白井 勝美

『外務省公表集』の戦前の部が全巻揃って刊行されることになったのは嬉しいことである。正直なところ研究を進めるにあたってこれまであまり公表集を重視しなかった。つまり公表されないものこそ外交交渉の神髄があるとの考えからである。太平洋戦争が敗北に終わり極東国際裁判の關係もあって日本の外交記録が一般に公開され次々に事実が明らかになると研究者の関心が未発表の資料に集中したのは当然であった。しかし翻って考えると外交は公表されたものと秘密なもの、が交錯しながら展開するのである。

公表集に「日満議定書」（一九三二年）が載っている。議定書は二カ条に過ぎない。これには重大な内容をもつ秘密文書がついていたことは現在周知の事実である。どうしても秘密文書に眼が奪われがちであるが、真に重要なのは公表された二カ条とも云えるのである。斉藤首相は数ヶ月後、来日した英国の劇作家バーナードショーに日満議定書の締結が大失策であり、それを止めさせるには首相就任が遅すぎたと語っているが、この時斉藤の脳裏にあったのは勿論公表の日満議定書であり、満州国の承認であった。

外務省が満州事変、上海事変について公表し、公表集に掲載したのは事変勃発から国際連盟脱退まで三十九文書と付録十五編、参考五編である。その内容は日本の方針や声明、国際連盟理事會、總会の日本にたいする通告や決議、日中、日米間の往復文書さらに外相の外交演説など満州事変の性格、意義を考える上で基本的な文書集となっている。弊原外相が日本にとつての満州付属地をアメリカにとつてのパナマ運河地帯に比していることなどはこの公表集ではじめて知ったことの一つである。

『外務省公表集』は日本外交を論ずる上で先ず最初に見て、そして再び見る資料集と称することが出来るよ。

不思議な臨場感をもつて迫ってくる資料

立教大学教授

北岡 伸一

近代日本の外交の特徴の一つは、対外關係に対する国民の強い関心であった。それは政府にとつて有力な後援であると同時に、恐るべき障害でもあった。実際、在野派はつねに政府の外交を「軟弱外交」と批判し、自主独立の外交を求め、しばしば大きな国民運動を巻き起こして政府を脅かした。

政府は、このような国民の関心に応え、重要な外交の推移の要点を適宜公表した。今回まとめられた『外務省公表集』が、それである。日本の議会の外交論議は、諸外国に比べても党派職が強すぎ、客観的に情報を伝達し、議論を深める場にはなりにくかった。その分だけ、この『外務省公表集』の役割は大きかったのである。

ここに収められている情報は、もちろん外交の事実そのものではない。政府も知らなかった事実は当然含まれていないし、また政府が国民に知らせたくなかった事実は隠されている。しかしまったく恣意的な情報では、国民の信頼を得ることも出来なかった。

われわれは、今日の外交史の知識の上に立って、『外務省公表集』を読むことが出来る。当時の政府の外交がどのような認識の上に立って行なわれていたか、そして当時の世論の動向にどのような配慮が払われていたかを見ることが出来る。そうした関心をもつて読むとき、ある程度意図的に編集された文書であるにもかかわらず、不思議な臨場感をもつて迫ってくる資料である。

『外務省公表集』の重み

筑波大学助教授

波多野 澄雄

十九世紀までは、特定の対外問題をめぐる外交交渉の経過や結末が国民の前に公表されることはまれであった。しかし、二〇世紀にはいつて市民の政治参加が近代国家の課題となり、外交についてもいかに国民的利益に沿った運営をなすべきか、その民主的統制をいかに進めるかという課題に為政者も直面することになる。外交も内外の市民的世論の動向を確認しつつ運営することが求められる時代に入ったのである。第一次世界大戦後のウイルソン大統領による「新外交」「公開外交」の提唱はまさにこうした課題に答えようとするものであったが、このとき日本でも外務省公表集の編纂刊行がはじまり、以後、第二次大戦後に一時的に中断はあったものの、現在まで連続として続けられている。今回刊行される戦前期分は外交権が天皇に帰属していた時代のものであり、それだけに外交権が国民に帰属し、情報があふれる時代の戦後期のものに比べて重みがある。一編の声明や談話が発表される過程では、内外世論の反響や相手国の反応から、世論を操作し誘導する可能性まで吟味されるのであり、例えば、「満州事変關係公表集」や「支那事変關係公表集」を一読するだけでも、意外なほど情報量が多いのに驚かされるとともに、そうした吟味の跡がうかがわれきわめて興味深い。

支那事變關係公表集 (第一號)

目次

一、蘆溝橋事件ニ對スル情報部長説明(七月八日)……………	一	二四、上海支那側空爆ニ對スル外務省情報部長談(英文)(八月十四日)……………	五八
二、演習權ニ對スル情報部長説明(七月九日)……………	三	二五、上海支那側空爆ニ對スル外務省情報部長談(佛文)(八月十四日)……………	六一
三、帝國政府第一次聲明(七月十一日)……………	三	二六、上海ニ於ケル戰間忌避希望ニ對スル情報部長談話(八月十六日)……………	六四
四、平漢線ニヨル軍需品輸送ニ關スル情報部長談話(七月十九日)……………	六	二七、帝國政府第二次聲明(八月十五日)……………	六六
五、外務當局見解(七月二十日)……………	一〇	二八、北支事變ニ關シ「ドツ」英國代理大使堀内次官來訪ニ關スル件(八月十九日)……………	七一
六、南京ニ於ケル交渉ニ對スル情報部長談話(七月二十日午前零時五十分發表)……………	一三	二九、支那側檢閲ノ不法振ニ關スル情報部長談話(八月二十五日)……………	七七
七、五里店ニ於ケル支那側發砲ニ對スル情報部長談話(七月二十日)……………	一八	三〇、中南支沿岸ニ於ケル支那船舶ノ交通遮斷ニ關スル外務省發表(八月二十六日)……………	七九
八、郎坊事件ニ關スル情報部長談話(七月二十六日)……………	二〇	三一、「ヒューグゼン」大使射擊事件ニ對スル情報部長談話(八月二十七日)……………	八一
九、廣安門事件ニ對スル情報部長談話(七月二十七日)……………	二三	三二、「ヒューグゼン」大使射擊事件ニ對スル情報部長談話(八月二十九日)……………	八二
一〇、内閣書記官長發表(七月二十七日)……………	二五	三三、我外務當局ノ見解(八月二十九日)……………	八三
一一、自衛措置遂行ニ當リ外務省情報部長談話(七月二十七日)……………	二九	三四、對ソ支不可侵條約見解(八月三十日)……………	八四
一二、天津駐屯軍聲明(七月二十八日)……………	三三	三五、本邦人ノ支那渡航取締(八月三十一日)……………	八五
一三、天津空爆ニ對スル情報部長談話(七月三十日)……………	三六	三六、日本ノ對支政策ト題スル堀内外務次官「ラヂオ」演説(九月二日)……………	八七
一四、支那軍北上狀況ニ關スル情報部長談話(八月二日)……………	三八	三七、廣田外務大臣聲明(九月二日於外相官邸外人記者會見)……………	九五
一五、天津治安維持會設立ニ關スル情報部長談話(八月二日)……………	四〇		
一六、通州事件ニ關スル情報部長發表(八月二日)……………	四二		
一七、保定治安維持會ニ對スル情報部長談話(八月二日)……………	四三		
一八、通州事件ニ對スル情報部長談話(八月四日)……………	四四		
一九、支那中央軍ノ北上狀況ニ對スル情報部長談話(八月七日)……………	四六		
二〇、中央軍ノ津浦線ニヨル北上狀況ニ對スル情報部長談話(八月九日)……………	四七		
二一、北京入城部隊司令聲明中ノ「政治干與」問題ニ對スル情報部長談話(八月九日)……………	四九		
二二、上海ニ於ケル大山中尉殺害事件ニ對スル外務當局發表(八月十日)……………	五〇		
二三、大山事件ニ對スル情報部長説明(八月十一日)……………	五四		
		三八、支那沿海航行遮斷ニ關スル外務省聲明(九月五日)……………	一〇五
		三九、「ヒューグゼン」大使遭難ニ關スル回答(九月七日發表)……………	一〇七
		四〇、外務省發表(支那渡航取締方ノ件)(九月九日)……………	一一
		四一、支那戎克武裝狀況ニ關スル情報部長説明(九月十五日)……………	一一
		四二、支那ノ聯盟提訴ニ對スル外務當局ノ見解(九月十五日午前)……………	一一六
		四三、支那船舶ノ國籍移轉及假裝ニ關スル在京各國大使宛宛書(九月十八日)……………	一二一
		四四、支那船舶航行遮斷ニ關スル記者團質問ニ對スル當局談(九月十八日)……………	一二二
		四五、駐支英國大使遭難事件我方最終回答(九月二十二日發表)……………	一二四
		四六、在支英國大使負傷事件ニ關スル昭和十二年九月二十三日附在	
		京英兩大使發外務大臣宛書翰(九月二十三日)……………	一二九
		四七、日支兩空軍損傷ニ對スル日支兩國發表對照表(九月二十四日)……………	一三一
		四八、諮問委員會ノ事業參加招請ニ對スル帝國政府回答(九月二十五日)……………	一三八
		四九、南京空爆個所公表(九月二十六日)……………	一四一
		五〇、南京廣東空爆ニ對スル情報部長談話(九月二十七日)……………	一四三

■外務省公表集 全12巻構成

書名	収録文献
第一巻	第一輯・第二輯 (大正8年～10年)
第二巻	第三輯・第四輯 (大正11年・12年)
第三巻	第五輯～第七輯 (大正13年～15年)
第四巻	第八輯～第十二輯 (昭和2年～8年)
第五巻	第十三輯・第十四輯(昭和9年・10年)
第六巻	第十五輯・第十六輯(昭和11年・12年)
第七巻	第十七輯～第十九輯(昭和13年～15年)
第八巻	滿州事変及上海事件関係公表集
第九巻	支那事変関係公表集
第十巻	政府公表集―対外関係― 昭和16年度
第十一巻	政府公表集―対外関係― 昭和17年度
第十二巻	政府公表集―対外関係― 昭和18年度

※造本体裁…A5判/上製函入/クロス装
 ※配本予定、定価(分売不可)

第一回配本 第一巻～第七巻

揃定価九八、八八〇円(本体九六、〇〇〇円)
 一九九二年十月二十三日刊行

第二回配本 第八巻～第十二巻

揃定価八八、五八〇円(本体八六、〇〇〇円)
 一九九三年五月二十五日刊行

全十二巻揃定価一八七、四六〇円(本体一八二、〇〇〇円)

■クレス出版好評既刊書

日本外交史料集

全3巻 外務省調査部編纂
 徳川幕府の時代より、華府会議に至る日英、日米の関係を、膨大な外交文書を基礎に、外務省調査部が執務用として、昭和十二年、十四年に編纂し、部内に限って配付した貴重かつ信頼の高い史料集。
 日英外交史 全2巻 A5判/総一、五二〇頁 揃価三六、〇五〇円
 日米外交史 全1巻 A5判/四四二頁 定価一〇、三〇〇円

朝鮮総督府施政年報

全30巻(明治39年～昭和16年版) 朝鮮総督府編 広瀬順昭解題
 明治三十九年韓国統監府が設置されて以来、明治四三年の日韓併合をへて昭和一六年版まで刊行された日本の朝鮮統治の年次報告書である。行政、司法、治安、財政、金融、交通、産業、教育等各分野を網羅している、日本の朝鮮支配研究の基礎史料の一つである。
 A5判/総約一六、一〇〇頁/揃定価三九一、四〇〇円

南洋叢書

全5巻 満鉄東亜経済調査局編 原田勝正解題
 第一次大戦後、とくに一九三〇年代にはいり日本の資源獲得のために目標となった地域(蘭領東印度、佛領印度支那、英領マレー、シヤム、比律賓)の広範囲に及ぶ高度な資料集である。経済・商業・貿易・交通・国際関係等の研究者の方にご利用いただける資料。
 A5判/総三、一〇〇頁/揃定価七二、一〇〇円

樺太廳報

全7巻 樺太廳文書課編 荒澤勝太郎解題
 樺太廳の施政並に法令に関する意図や其の内容を詳かにし、又汎く本島の産業・文化に関する研究意見を紹介することを趣旨とした官庁誌。第一号(昭和12年5月)～第二十号(昭和13年12月)の全号全頁、「樺太時報」の目次・樺太日誌・資料月報を全号復刻。
 A5判/総四、四二〇頁/揃定価九九、九一〇円